



IT・エレクトロニクス産業の動向

情報通信ネットワーク産業協会 専務理事 すけむね 資宗 よしゆき 克行



「情報通信ネットワーク産業協会」専務理事の資宗と申します。私は、2006年9月に着任したばかりですので、このような場でお話するにはあまりにも期間が短いのではないかと思いましたが、是非にということでしたので、お引き受けした次第です。

今日のお話のタイトルを「IT・エレクトロニクス産業の動向」としましたが、これは、今回のお話があったときにタイトルをと言われて出したものなのですが、対象が広すぎて、今になって反省しています。今日は、CIAJの活動の中で、通信や情報機器が現在どういう状況になっているのかということをお話しさせていただきたいと思えます。

CIAJの役割とは

「情報通信ネットワーク産業協会」という名前ですが、情報と通信とネットワークの産業ですから対象が広すぎること、あまりわかりやすいネーミングではありません。私がかかる前からこの名前でしたのでこれは致し方ない。ということで私は、英語の略称のCIAJを使っております。英語の略称は、昔からCIAJでしたから、今日お集まりの皆様方はひょっとすると、私どもの協会の昔の名前「通信機械工業会」の方がなじみ深いかも知れません。「通信機械工業会」を母体にして、他の団体にも加わっていただいて今日の「情報通信ネットワーク産業協会」になっています。

では一体何をしているのかということですが、私の着任以来の印象では、大きな役割は二つあります。一つは、業界特有の共通の課題とか共通の問題とかに対して、個々の企業が個別に対応するよりは、まとまって対応した方がいいのではないかと。できればそれを国で取り上げていただいて、国の政策として進めていただく。そういった機能を我々がやらなければいけないのではないかと思います。

二つ目は、会員相互がみんな仲良くして、お互いの商売にうまく役立つようにしよう。一種の会員相互のクラブのようなものですが、皆様から非常に重宝がられています。なかなかお会いできない方とか交流のあまりないセクションの方と、CIAJという名前の下でいろいろ交流できますので、非常にありがたいというお言葉をいただいています。

これらが私どもの主な活動ということになると思っております。

情報通信機器シェアの変遷

昔で言うと交換機、今で言うとルーター、サーバー、それから多種多様な光通信関連の部品、端末、特に今日では携帯端末が大きな構成要素ですが、そういうものが今のぐらいい日本で作られているのかということ、だいたい4兆3000億円くらいです。これは、昔に比べると相当大きくなっておりませんが、この4兆3000億円のほぼ半分が携帯端末です。いかに大きなシェアを占めているかが分かります。

それを時系列で見ると、ずっと右肩上がりできたのかということそうでもなくて、実は2000年がピークでした。このときが4兆8000億円。そこから、小さな上下はあるものの一度どんと下がって、それからまた少し回復基調にあります。今はほぼ横ばいといった感じです。

昔は、通信は電電公社の独占であり、電電公社に納める製品がすなわち通信機械の売上げにほぼイコールで、残りが輸出だったのですが、今は競争下で中身が一変しており、携帯が圧倒的なウエイトを占めています。そのあとをルーター、サーバーといったような製品が追いかけている。こういう状況です。

輸入ウエイトの増加

着任後、通信機器関連のデータを見て一番びっくりしたのは、ごくわずかですけれども輸出より輸入のほうが多いということでした。私などは小さいころから、日本は輸出立国だ、輸出で稼がなければいけないとたたき込まれてきたのですけれども、実際のデータを見てみますと、今は入超になっています。それはどういうことなのかということ、やはりルーター、サーバーは、外国勢が非常に強いということです。

携帯電話にしても、日本のように高度化、進化したサービスは諸外国にはありませんので、日本のメーカーしか日本で使われるような高機能な携帯電話を作れなかったのですが、最近じわじわと外国の製品も入っています。この両方が相ま



って、今は輸入が多くなっているようです。

ただ、輸出と輸入というのは御存じのようにいろいろからくりがあり、何をもって輸出とするか、何をもって輸入とするか。輸入と言っても、日本のメーカーは今全世界に展開していますから、外国から持ってきたものを日本で最終的に加工するとか、その逆もありますので、それ自体を見ただけでは何とも言えないし、もうちょっと詳しく分析しなければ正確には分かりません。しかしそれにしても、昔は輸出が非常に大きなウエイトを占めていたのですけれども、輸出と輸入がほぼプラスマイナス、ゼロになり、それが今マイナスの方に来ているのです。

国際競争力強化の必要性

とりあえず、日本のメーカーが作ったものが入っているのが大丈夫だと言えればまだまだいいのでしょうけれども、実はそれがどうもそうでもなさそうだとところから話がちょっと深刻になっています。そして今それが、大きさに言えば国を上げたテーマになっています。この分野における国際競争力ということになるわけです。ITそれ自体についてはいろいろな国の振興もありましたし、それぞれの会社なり通信事業者なりが一生懸命頑張っていて、現在は世界と比べても遜色のないレベルにまできました。例えば光サービスなどはその一つの例でしょうし、携帯にしても、台数はともかく中身、質、サービスのクオリティは断然、他を圧しています。日本国内のITという点では、日本はIT大国になったと言っても別におかしくはないし、そのとおりだと思います。

しかし、普通はそうなると、さぞかし日本からいろいろなものを作って世界に売り歩いているのだらうとお思いかもしれないのですが、それがどうもそうではない。むしろそれは逆転しているということが今深刻な話になっておりまして、これが官民挙げての国際競争力強化という大合唱につながっていると思います。

外国メーカーの躍進

例えば、昔でいう交換機、今はルーター、サーバーというハードウェアですけれども、少なくとも昔は日本の国内で使われている交換機は日本の、CIAJの会員会社の、いわゆる大手が作っていたのです。しかし今はもうその様相は一変しておりまして、シスコを始めとする諸外国からの製品が続々流

れ込んできています。世界的なシェアも同様に、今シスコの一人勝ちという現象が起きております。

携帯になると、日本とそれ以外の国とは様子が一変します。日本は先ほど言いましたように非常にサービスが高度化していますので、諸外国の携帯端末をそのまま持ってきても使えないということがあります。携帯の場合はそれぞれの方式が違うとか、ジェネレーション、例えば第2世代とか第3世代、3.5世代という言い方をしますけれども、そういう時系列の流れが違うということでそれぞれまちまちです。

世界的な携帯電話のシェアで言うと、ノキアとかモトローラ、お隣の韓国のサムスン、こういったところが非常にシェアをとっており、日本のメーカーは残念ながら食い込めていません。日本のITは、世界と見比べても遜色のないレベルにきた、これで一息だということはあるのですけれども、国際競争力、それぞれの国同士ということになりますと、今言ったような課題が非常に問題になってきております。

今後の方向性

ようやくいわゆる不況、デフレを脱して、今日本の景気も少しずつ上向いているので、これからが正念場というか、国際競争力を増強していく時期ではないかと思えます。おかげさまで総務省、経済産業省も異口同音に、とにかくこれではまずいのではないかと、少し競争力をつけようということで、ベクトルが合い出した。メーカーの方も非常に長い不況でかなりしんどかったのですけれども、皆様方御存じのように、この業界も少しずつ各社元気が出てきたので、そういう意味ではちょうど今が良いチャンスではないかと思えます。

ただ、これはなかなか難しい。大変です。どうするか、どうなるかは少し問題や課題を整理して、何をやるべきかをまずまとめてみようという作業が行われていまして、年明けにはいくつか具体策が出てくると思えます。そういう指針に則って実務をこなしていくことが、今後の私どもに課された一番大きな役割ではないかと思っています。

今日は御清聴、どうもありがとうございました。

(2006年11月20日第352回ITUクラブ例会より)